

現職教育資料

◇	はじめに……………	1
1	国の動向から……………	2～3
2	幼保小の架け橋プログラム……………	4～5
3	栃木県の取組……………	6～7
4	架け橋期の教育の充実のための提案……………	8～11
◇	おわりに……………	12

「できる!」、「やりたい!!」をつなぐ幼小の架け橋

～架け橋期の教育の充実で 子どもがワクワク、大人もワクワク～

◇ はじめに

令和4年6月に「こども基本法」が成立し、子どもの健やかな成長という目標に向かって、子どもに関わる関係者が一体となって連携・協働し、国全体で、「こどもまんなか社会」の実現を目指すという大きな価値の転換がされました。今、幼小連携に関わるこども施策等が大きく進められ、これまで以上に幼小連携推進の後押しとなっています。

本号は、幼小連携に係る国の動向の解説とともに、子どもの「できる!」、「やりたい!!」をつなぐ架け橋期の教育の充実を目指した取組への提案です。

5歳児から小学校1年生の2年間は、
生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる重要な時期

5歳児



それまでの経験を生かしながら新しい課題を発見し、
新しい方法を考えたり試したりして
実現しようとしていく時期

小学校1年生

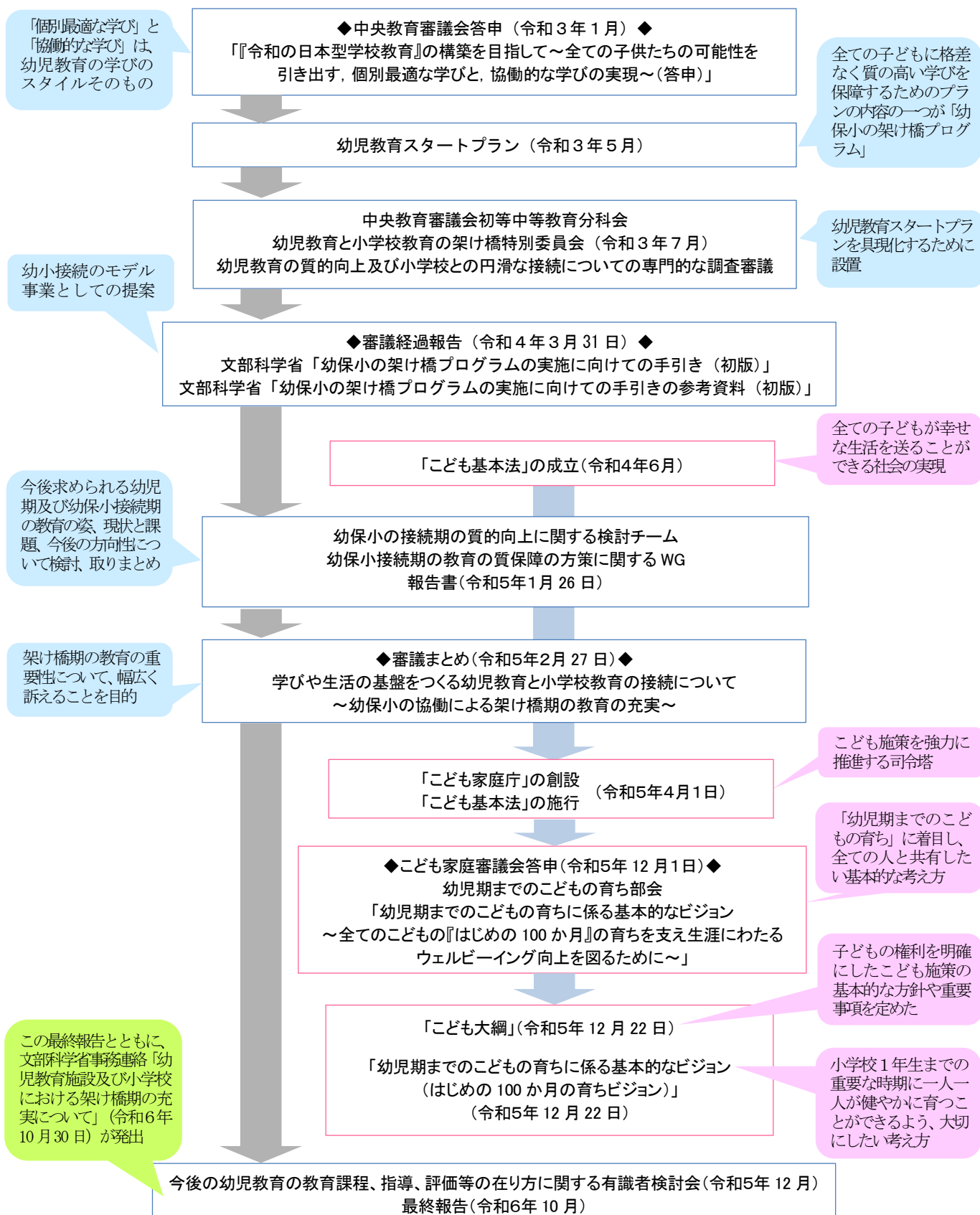


自分の好きなことや得意なことが分かってくる中で、
それ以降の学びや生活へと発展していく力を
身に付ける時期

この2年間で **「架け橋期」** と名付け、
みんなで子どもたちの育ちと学びを支えていきましょう!

1 国の動向から

架け橋期の教育の充実については、令和3年1月の中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』、いわゆる「令和答申」から始まっています。



◆「令和答申」は、小学校以降のことでしょうか

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等の取組が進められています。このような学びの姿は、幼児教育において長年大切にされてきた「一人一人の発達や特性に応じた指導」や「安心感の中で伸び伸びと自己発揮できる関わり」そのものです。小学校以降の教育に、子どもそれぞれの興味・関心や一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す幼児教育の「環境を通して行う教育」を取り入れた教育実践が期待されています。

◆幼児教育において育みたい資質・能力とは

幼稚園・こども園・保育所にも小学校の学習指導要領と同じように、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針があります。3歳以上の教育に関わるねらいや内容に関して整合性が図られ、施設類型を越えて、幼児教育において育みたい資質・能力、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が、小学校以降の教育において育む資質・能力と系統的に示されています。小学校学習指導要領においても、施設類型や学校種を越えて、子どもの成長を理解する手掛かりに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や学校段階等間の接続を図ることなどが明記されました。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、資質・能力が育まれている子どもの姿であり、特に年長（5歳児）後半に見られるようになる姿です。幼稚園等と交流したり、授業を計画したりする際に、日頃の思いや願いと照らし合わせて子どもを見つめ直し、どのように育ってきているかを振り返るヒントとなります。



【資質・能力のつながりのイメージ】



【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- (1) 健康な心と体 (2) 自立心 (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- (9) 言葉による伝え合い (10) 豊かな感性と表現

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は

- ★到達目標ではなく、方向目標です。
- ★一つずつ取り出して指導したり、評価したりするものではありません。
- ★すべての子どもに様に育つものでもありません。
- ★5歳児終了の姿は、1年生始まりの姿です。

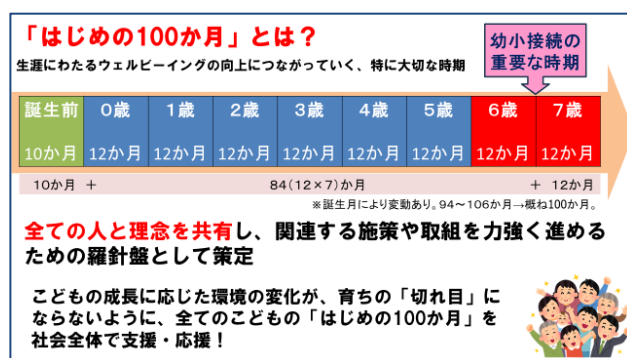
◆やっぱり子どもを真ん中に～国全体で幼児教育に注目～

令和5年4月に「こども家庭庁」が創設され、「こども基本法」が施行されました。国全体で「こどもまんなか社会」の実現を目指すという大きな価値の転換です。令和5年12月には、それを実現していくという強いメッセージである、子どもの権利を明確にした子ども施策の基本的な方針や重要事項を一元的に定めた「こども大綱」が成立しました。併せて、「幼児期までのこどもの育ち」に着目して、全ての人が共有したい理念や基本的な考え方が整理され、子ども施策の羅針盤として「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」いわゆる「はじめの100か月の育ちビジョン」が策定されました。



◆立場を越えてみんなで、切れ目なく

「はじめの100か月の育ちビジョン」は、「幼児期まで」とあり、小学校以降には関係がないと思いがちですが、妊娠期がおおむね10か月、誕生から小学校就学までの7年間で84か月、さらに小学1年生の12か月でおおむね100か月としています。まさに、幼小接続の重要な架け橋も含まれています。この時期を生涯にわたるウェルビーイングの向上につながる特に大切な人格の基盤を築く重要な時期として、全ての人とその理念を共有し、子どもの成長に応じた環境の変化、例えば、生まれるとき、入園のとき、小学校入学のときなどが、育ちの切れ目にならないように、社会全体で支援・応援していくということです。



【はじめの100か月とは】

2 幼保小の架け橋プログラム

小学校の生活科は平成元年に新設された教科です。平成 20 年に入学当初の指導の工夫など、スタートカリキュラムの考え方が学習指導要領解説に示され、それまで以上に、生活科を中心に幼児教育との接続が図られてきました。



「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」（以下、「手引き」）には、幼小連携・接続に係るこれまでの取組の成果や課題が挙げられています。

【これまでの連携の成果】

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された
- ・交流行事を行う園や小学校が増えた
- ・小学校でスタートカリキュラムの実施が進んできている 等

【課題】

- ・形式的な連携に留まっているのではないか
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、連携の手掛かりとして十分機能していない 等

課題について、例えば、このような声が…



交流活動をして、子どもが小学校を楽しみになるようにすれば、連携・接続の目的は果たしていますよね。



隣の小学校と交流活動を毎年やっています。行事として終わってしましますが・・・。



一人一人の情報交換、引継ぎの機会が設定されているので、連携・接続の取組は十分です。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のことは分かってきました。でも、生かすって、どういことでしょうか・・・。

上の声では、子どもの発達を見通し、架け橋期の教育の内容や方法について振り返ったり、充実・改善を図ったりすることには至っていません。

そこで、「手引き」には、次のような「ねらい」が示されています。

【幼保小の架け橋プログラムのねらい】

- 幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5 歳児のカリキュラムと小学校 1 年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進
- 3 要領・指針、特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かしていくことができる手立てを普及
- 架け橋期に園の先生が行っている環境の構成や子どもへの関わり方に関する工夫を見える化し、家庭や地域にも普及
- 幼児期・架け橋期の教育の質保障のための枠組みを構築し、データに基づくカリキュラム・教育方法の改善を促進

このねらいを踏まえ、令和 4 年度から 3 年間、重点的に全国で 19 のモデル地域における先行事例の実践として、全国的な架け橋期の教育の充実に向けた体制づくりとカリキュラムの作成に向けた取組を並行して、以下のように推進してきました。

並行して推進

【全国的な架け橋期の教育の充実に向けた取組】

- 「幼保小の架け橋プログラムの手引き（初版）」や「参考資料（初版）」等の趣旨・内容を的確に周知・普及する。好事例を分析し、幼保小の関係者等に展開する。
- 各自治体における架け橋期のカリキュラム・教育方法の充実・改善を促進する。
- 幼保小の連携体制や、幼児教育推進体制（幼児教育センター、幼児教育アドバイザー）の設置を促進する。
- 幼保小の連携・接続に関する様々な自治体の取組を共有するプラットフォームづくりを行う。
- 園・小学校や家庭・地域向けにも分かりやすいパンフレット（架け橋期の取組の意義・効果を含む）や動画等の多様な発信を行う。

【モデル地域における先行事例の実践】

架け橋期のカリキュラムの開発、実践、評価・改善 等

- ・北海道 ・岐阜県 ・滋賀県
- ・広島県 ・山口県 ・高知県
- ・大館市（秋田県） ・白石市（宮城県）
- ・西会津町（福島県） ・川越市（埼玉県）
- ・横浜市（神奈川県） ・袋井市（静岡県）
- ・掛川市（静岡県） ・京都市（京都府）
- ・枚方市（大阪府） ・箕面市（大阪府）
- ・津和野町（島根県） ・高松市（香川県）
- ・竹田市（大分県）

さらに、取組を推進していくためには、

園長・校長のリーダーシップと、自治体の支援が特に重要となります

そのような中、令和5年2月には「[学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～](#)」（審議まとめ）が取りまとめられました。架け橋期の教育の重要性について、家庭や地域も含め、子どもに関わる全ての関係者に幅広く訴えることを目的としたものです。幼児教育と小学校教育の立場それぞれから歩み寄り、「興味や関心を生かした学び」を実現していくこと、幼児教育施設と小学校が協働し、共通の視点をもって教育課程や指導計画等を具現化していくことなど、架け橋期の教育の充実を図ることが重要であると示されました。



令和6年10月の「[今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会最終報告](#)」においても、「幼保小の架け橋プログラム」の取組の成果が示され、幼児教育施設と小学校の両者が連携の意識をもち、教育実践を見合い、相互の共通理解を図ることが重要であることが提言されました。また、小学校低学年において、いじめの認知件数が多く、不登校児童の増加率が高いことを踏まえると、いじめ・不登校対策の観点からも、幼小接続期の教育の充実に取り組むことが重要であることが明記されました。



一部の地域では、

【幼保小架け橋プログラムの成果】

- ・ 幼児教育施設において、小学校の各教科等の指導の専門性を参考に幼児の主体的な遊びを支える働きかけが充実
- ・ 小学校において入学当初の指導方法が変わり、子どもの主体的な姿がより見られるようになってきている

等

成果により、次のような声が聞かれるようになってきています。



幼

相互参観や子どもの姿を語り合うことで、幼児期に育まれた資質・能力が小学校につながっている部分が見えてきました。



幼

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解が深まりました。遊びの中に様々な学びがあることを発信できるようにしたいです。



幼

市主催の幼小合同研修会が開かれました。小学校区のグループに分かれ、園の先生方と一緒に、目指す子どもの姿について話し合いました。地域で子どもを育てるという意識がもてました。



小

子どもの姿を基に語り合うことで、架け橋期の子どもたちにとってどのような経験が必要か、大人が何を大切にしたらよいか、共有できました。お互いのカリキュラムに書いておきたいです。



小

小学校でも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が見られるのが分かります。どのような状況がその姿を支えているのかを考えるきっかけになりました。



小

近隣の校長先生と園長先生が仲良しで、定期的に話し合う機会を設定してくれるようになりました。交流計画を年間指導計画に位置付け、活動内容を検討しています。一緒に楽しめる活動を子どもたちと計画していて、みんなワクワクしています。

成果は上がっているものの全国的に見ると**未だ不十分**、取組状況に**差**がある

さらなる推進のために、

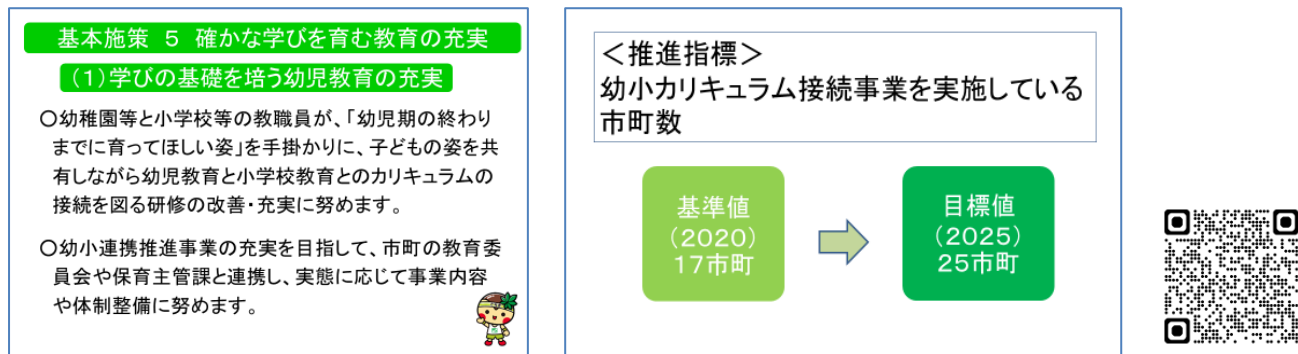
- ★ いじめ・不登校対策の観点からも、幼小接続期の教育の充実に取り組むことが重要
- ★ 幼児教育施設と小学校の両者が連携の意識をもち、教育実践を見合い、相互の共通理解を図ることが重要
特に小学校入学当初は、幼児教育と小学校教育との指導方法の連続性・一貫性を確保することが重要
- ★ 小学校以降で進められている教育の方向性（「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につなげていくこと）は、子どもそれぞれの興味・関心や一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す観点から、幼児教育の「環境を通して行う教育」の考え方とつながっており、小学校教育において、ICT環境や先端技術も活用しつつ、「環境を通して行う教育」という幼児教育の基本的な考え方を取り入れた教育実践の研究・普及を行っていく

また、地方自治体においては、学校教育の専門的知見を有する教育委員会が中心となり、「幼保小の架け橋プログラム」の推進体制の構築を図ることが重要であることが提言されました。

3 栃木県の取組

「幼保小の架け橋プログラム」と同様の取組は、栃木県においても確実に進んでいます。「[栃木県教育振興基本計画 2025～とちぎ教育ビジョン～](#)」において、基本政策5「確かな学びを育む教育の充実」の中で、「(1) 学びの基礎を培う幼児教育の充実」を掲げています。幼小の教職員が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、子どもの姿を共有しながら、幼児教育と小学校教育とのカリキュラムの接続を図る研修の改善・充実に努めることや、幼小連携推進事業の充実を目指して、市町の教育委員会や保育主管課と連携し、実態に応じて事業内容や体制整備に努めることを主な取組としています。これらの推進指標に「幼小カリキュラム接続事業を実施している市町の数」を位置付け、2025年の目標値を25市町としています。

また、市町の教育委員会や保育主管課が連携の下、新規に連携組織を立ち上げ相互参観が進められたり、市町全体の幼小合同研修会が開催されたりするなど、自治体の支援を基にした幼小連携・接続が具体的に進められてきています。



【栃木県教育振興基本計画 2025～とちぎ教育ビジョン～から】

具体的な取組として、以下のような研修・事業を行っています。

【幼小連携推進会議】（毎年）

幼稚園、幼保連携型認定こども園、保育所及び小学校等における教育の充実と相互の円滑な連携を図るため会議を開催しています。年2回の開催で、本県幼児教育行政全般や架け橋期の教育の充実について、各機関の代表者から広く意見を聴取し、現状と課題を明らかにしながら今後の施策展開に生かしています。



【とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト】（令和2年度～令和7年度）

毎年5市町を指定し、2年間で市町の組織的な体制づくりを推進したり、市町が主体となって行う事業プランや研修の内容を設定・改善したりできるよう、それぞれの現状に応じた支援を行います。全体会議の他、市町の担当と一緒に研修内容を考えたり、必要な情報提供を行ったり、総合教育センターの指導主事が研修の講師を務めたりしながら、それぞれの市町の一步前進の取組を支えています。



【幼小接続推進者研修】（令和4年度～令和7年度）

市町から推薦された幼児教育施設と小学校の教職員がペアで受講する研修です。

年間5日間を通し2人1組で、小学校1年生の授業参観や年長後半の保育参観、相互職場体験等を通して幼小の学びをつなぐ「ジョイントカリキュラム」を作成し、理解を深めていきます。受講後は、幼小接続推進者として各市町で行われる研修会等で講師を務めたり、指導助言やコーディネーターの役割を果たすような人材育成をしています。



【ジョイントカリキュラム】



【合同研修【幼小】】学校巡査（毎年）

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を目指して、幼小の教職員が一堂に会し子どもの育ちを共有し、架け橋期の教育を充実させるための資質・能力を養うことを目的としています。

令和6年度は、「同種の活動」を視点に、子どもの姿を語り合い、この時期の共通項や大人の心もちなど架け橋期の教育の在り方について考えました。



【幼児教育調査研究】（毎年）

幼児教育に関する今日的課題について調査研究を行い、その成果をリーフレット等にまとめ、広く発信・提供し、課題解決の一助とすることを目的としています。

令和6年度は、架け橋期の教育の特性について広く認識の共有を図るための工夫についてリーフレットにまとめ、発信することで、全ての子どものウェルビーイングへつながることを目指しています。



この他にも、[幼小連携推進状況調査](#)、[幼児教育情報誌「おうち」](#)の発行、幼児教育センターだよりの発行、教育・保育アドバイザー事業等、様々な取組を実施しています。



幼小連携推進状況調査



幼児教育情報誌「おうち」

4 架け橋期の教育の充実のための提案

県内でも幼小の合同研修等が各地域で実施されるようになってきましたが、グループ協議等においては、子どもの「できないこと」や「苦手なこと」に目が行き、お互いの要望に終始してしまうことや「幼保小の架け橋プログラム」の推進において、何をどうしたらよいのかと身構えてしまうということも見受けられました。

そこで、子どもの「できること」「やりたいこと」を生かした幼小連携・円滑な接続のために、二つの提案をします。



担任ができること ～子どもたちの『おもしろさ』について、語り合いませんか？～

幼児期の一体的に育まれる資質・能力と、小学校以降の各教科等の特質に応じて整理された資質・能力は、保育者と教員の教育観の違いも相まって、見え方・捉え方が異なっていることがあります。幼児期の遊びを通した学びが小学校の学習にどのようにつながっているかについて、子どもの姿を基に、具体的な対話を通して相互理解していくことが重要になります。

幼児教育と小学校教育には、「違い」がある一方、栽培活動、動物の飼育、季節の自然物を使って遊ぶ、製作活動など、「同じ」こともたくさんあります。この「同種の活動」における子どもの姿について、幼小の先生で対話をしていくと、架け橋期に共通した「学びのプロセス」が見えてきます。

例えば、次のような手順で対話を深めてみましょう。

- Step 1** 幼児教育と小学校教育の似た活動、同じような活動や取組である「同種の活動」を挙げ、話し合うテーマを決めます。
- Step 2** 「同種の活動」の中にある子どもたちの「思考のおもしろさ」を語り合います。くすっと笑ってしまうこと、驚いたこと、感激したこと、感心したこと、子どもから教わったことなどを語り合うことで、幼小の先生方は共に笑顔で「子どもって、よくこういうことありますよね。」というように、架け橋期の子どもの思考の過程や特性が共有できます。
- Step 3** 語り合う中で、「あら、似てますね。」から、この時期に大切にしたい「子どもの姿」や「大人の関わり方・心もち」「環境」「学ぶプロセス」などが見えてきます。語り合いが盛り上がるほど、架け橋期の子どもの共通項が見えてきます。
- Step 4** 共通項から、架け橋期のポイントを導き出します。

カリキュラムの作成を目的にしなくても、語り合い、対話を通して見えてきたことをワークシートに書き込み、可視化すると、自ずとカリキュラムにつながります。

令和6年度合同研修〔幼小〕においては、令和5年度幼児教育調査研究成果物リーフレット『『同種の活動』から見る架け橋期の教育～遊びや学びのプロセスからカリキュラムへ～』を活用し、同種の活動を視点に架け橋期の教育の在り方について協議、子どもの姿を中心に語り合いながら「つながるキーワード」を導き出しました。



【令和5年度幼児教育調査研究リーフレット】

例えば、花の世話をしている中で、アオムシやダンゴムシに興味・関心が向かい、花だけでなく、虫との関わり遊びや活動が発展していく二つの事例からは、上手な栽培がねらいではないことやその子のこだわりを認めるなど、大人が大切にしたい「環境・状況づくり」や「関わり方」などを確認、共有することができます。

【栽培活動「大きなあれ、わたしのお花」】



みんな菜の花を大切にしているのに、うちの子が、アオムシに関心を持っていて、大丈夫なのかしら・・・。

5歳児の保護者

花を育てているって言うんですが、うちの子、帰宅するとダンゴムシの話ばかり、楽しそうにしているんですが、大丈夫ですかね・・・。



1年生の保護者

5歳児

1年生

保育室の前の花壇にみんなで菜の花の種をまき、みんなで世話をし、花が咲くのを楽しみに育てていた。芽が出て、ぐんぐん大きくなってきたある日、菜の花のアオムシが発生し、大騒ぎである。

アオムシを見つけたのは、つまんで遠くに置いてきたり、家の人に聞いて、虫退治の牛乳スプレーをかけたたり、子どもたちなりに対策をした。

そんな中で、Mくんは、「先生、ぼくアオムシ育ててるんだ」と担任に言ってきた。そう言えば、他の子どもたちが退治対策にそしむ中で、Mくんは、何もせず、「Mくんも手伝ってよ」と「なんてやらないの？」と友達から責められていたことがあった。

次の日担任は、Mくんと一緒に、畑の一部分の菜の花を小さな発泡スチロール箱に植え替えた。その後も、Mくんは、昆虫図鑑を見ながら、アオムシの世話を続けていた。

生活科の単元「大きなあれ、わたしのお花」で、自分で選んだ花の種を一人一鉢にまき、それぞれが、きれいな花が咲くことを思い描きながら育てていた。「種が帽子をかぶって土から出てきたよ」「葉っぱのハートみたい」など、成長する過程で、多くの発見や気づきがあり、そのたびに発見カードに記録している。

そんな中、ミニひまわりを育てているOくんの発見カードには、時々ダンゴムシが登場し、ダンゴムシのことだけか記録されているときもあった。名前はジャック。いつも同じダンゴムシだと言う。

担任がOくんの鉢を見てみると、そこには、確かにダンゴムシがいた。担任は、その日の発見カードに「ミニひまわりを育てていたら、ダンゴムシともなにかよくなったんだね。」とコメントを書いた。

その後、Oくんは、ダンゴムシに関する本を読んで、ダンゴムシが住みやすいように鉢の中にコンクリートや木の葉を置いていた。



幼稚園教諭

幼稚園では、環境としてお花を育てます。発芽や開花の時にみんなで喜んだり、感動したりします。虫を退治する子、率先して水やりをする子等、関わり方はそれぞれですが、その子なりに自然の不思議・命の大切さを感じ取っています。



小学校教諭

自分の選んだ花を育てながら、成長の様子に関心をもって自分なりの働きかけをします。生命の大切さにも気付いていきます。上手に育てることがねらいではなく、一人一人の気づきや思考を大切にすることは、幼児期と共通していますね。



植物は
生命の代名詞！
出会いと関わりを工夫しよう



求めるのは上手な栽培や完璧な
世話ですか？
いえ、自分とお花との
関係です



植栽活動の
「ねらい」を明確に！
声かけや支援が違ってくる



無関係に見えることも
認めてみよう！
そこに支援の本質に迫る
こともあります



体験を通した学びは
教科学習の根っこ！
生活科もやっぱり
結節点です

その子なりの植物との関わりに付き合うと、子どもの思考の面白さが見えてくる！
「科学的な見方・考え方」を育む近道かもしれません。

また、アサガオの栽培活動の子どもたちの姿から、こんな語り合いも・・・



小学校教諭

植物に愛着をもって関わっているのは、
幼児期の経験ともつながっているのですね。

自分で育てている植物に愛着をもって関われるよう、子どもの目に入りやすい場所に植木鉢を並べるようにしています。

また、友達の植物を見たり比べたりして観察しやすいように場を設定しています。

色や形、感触等、気づきのきっかけとなる視点を示したり、言葉かけを工夫したりしています。

また、子どものつづやきを取り上げ、一人一人の気づきを学級全体に広げていくようにしています。

変化したり成長したりする面白さを感じられるような植物を育てています。

自然物に関わる中で、子どもが感じた不思議さや面白さに共感する姿勢を大切にしています。

植物を使った遊びに興味をもって取り組めるような環境の構成を工夫しています。

子どもたちと一緒に観察しながら、子どもたちの言葉に耳を傾け、疑問や驚きなどに共感するようにしています。



幼稚園教諭

「植物への愛着」「発見や知的な気づき」などの共通項から、大切にしたい子どもの姿や経験、関わり等が見えてきました。

共通項から見えてきた大切にしたい子どもの姿や経験、関わり等のキーワードが、各々のカリキュラムに記されているか確認したり、生かされるよう修正したりすることで、架け橋期のカリキュラムとして、実効性のあるものとなります。



管理職ができること

～子どものために3時間3分だけ時間をさいてください～

架け橋期の教育の充実のためには、「管理職のリーダーシップ」が必須とされています。しかし、「具体的にどう動けばいいのか？」は、悩むところです。そこで、栃木県教育委員会では、研修会等で管理職の先生方に「子どものために3時間3分だけ時間を割いてください」とお願いしています。

3時間

園長先生は「小学校の授業（できれば生活科）」を、校長先生は「幼稚園等の保育（遊び）」を職員2名を連れて見に行きませんか？

近隣の園・学校なら、行き帰りの時間を含めての3時間あれば可能です。ここでは、どの職員を参加させるかがポイントです。5歳児・1年生担任に限らず、お互いの保育・授業を見て心が動く人材、この先生を連れて行けばその後の幼小連携や園・学校経営にプラスに働くという人材を見極めていくことが重要となります。

3分

園長先生は卒園式の式辞の決まり文句に

「みなさんは年長さんで、何でもできたよね。園長先生は、そのことを校長先生にお話してあります。張り切って入学式に行ってくださいね。」

校長先生は入学式の式辞の決まり文句に

「校長先生は知っています。みなさんは年長さんで『何でもできたこと』、『何でもやろうとしていたこと』を園長先生から聞いています。」

3時間3分の提案のポイントは、「卒園式」と「入学式」であることです。ここには、もれなく「保護者」がいます。つまり、子どもたちの「できる」、「やりたい」だけでなく「保護者の安心」もつながることができるのです。そして、入学後に存分に自己発揮し、のびのびと学校生活を送ることができた1年生は、間違いなく校長先生の描く「学校経営の一翼」となります。その力は、高学年となったときに学校を支えるものとなり、やがては、中学校、高等学校へと続き、予測不能な社会を自分の力で切り拓く力となっていくはずで

す。1年間のうちのたった3時間3分です。子どもたちのために3時間3分だけでいいので、園長先生・校長先生にしかできないこととして取り組んでみてください。



◆リーダーシップを発揮して、幼小連携・円滑な接続に取り組む園長先生・校長先生がいらっしやいます

各々の特色を生かした取組を紹介します。

【宇都宮市】山王認定こども園・富屋小学校



園長先生・校長先生の役割を掲げ、幼小連携・接続に取り組んできました。

【園長の役割】

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識
- ・小学校と園が二人三脚で
- ・職員の分担を細分化
- ・交流活動の年数回の実施と毎年の継続
- ・全員の「楽しかった」が聞けるように

【校長の役割】

- ・児童ファースト
- ・スクラップ&ビルド
- ・（仕事を）同じやるなら楽しく
- ・できるだけ先生方の負担を少なく（率先垂範）

園長先生は「全員の『楽しかった』が聞けるように」、校長先生は「児童ファースト」を園長・校長の役割として掲げています。これらは「子どもにとってどうか」という子どもの最善の利益がベースにあります。園長・校長の良好な関係性が築かれ、入学前の引継ぎ等にも参加する等、その後の連携について進展がありました。まさに、園長・校長による架け橋期のマネジメントが実践されています。また、園の先生から「小学校までに～しなければ」という発言があったとき、校長先生は「遊びを十分させ、意欲的に遊びこめる子を育ててほしい。」と明言するなど、実りある内容でした。



園長先生

子どもたちは、交流の機会を積み重ねたことで「1年生の友達ができた」、「早く小学生になりたい」と、小学校へ入学することにワクワクする思いがこみ上げてきたようです。一過性でなく年に数回実施すること、そして、継続していくことで、小学校への高さある階段を、なだらかなスロープに変えることができるのではないのでしょうか。

「校長が自ら動く！」校長がやって悪いことはないはずです。「先生方にやってもらうのではなく、一緒にやりながら校長の思いを伝えていく」、「児童や園児の笑顔のために、楽しくやる」そうすることで、1年生と、とても近い関係が築けています。朝、にこっと笑ってあいさつをしてくれる、生え替わり途中で歯が数本欠けている子もいますが、そんなかわいい笑顔を見せてくれるのも、校長が自ら汗水垂らして動いたご褒美かなと思っています。



校長先生

【那須町】那須高原保育園・那須高原小学校



「目指すところに違いはない！」と子ども主体の保育・教育を進めています。

【那須高原保育園】

子どもの思いを大切に～「今日は何する」作戦会議～
子どもを第一に考える～運動会は通過点～
自分のことは自分で～やればできるを目指す～
気持ちのよい学びを～やったらできたを目指す～
子どもが一番よい状態を考える～始まりはその子が決める～
可能性を引き出す～みんなと一緒につくってこう～

同じ

【那須高原小学校】

児童の自己表現を大切に
児童を第一に考える
主体的に学び工夫して取り組む
誰もが「分かった」と実感できる学び
教室の心理的安全性の確保
一斉授業からの脱却

園では、子どもたちが育っていく過程で大切なことは何かを考えながら、小学校に入学しても様々なことに興味をもって、「やればできるんだ」の思いをもち、自分らしく生活できるように子どもたちを支えています。

小学校では、「みんなで同じことを同じようなやり方で同じペースで」からの脱却を大きなテーマとし、「スタートカリキュラムの再構築」、「遊びから学ぶ機会をつくる」、「学校中の全てが学びの場」、「授業に安心感をつくる」を行ってきました。園と小学校の共通性を見出し、遊びは教科の外にあるのではなく、教科の学びの中に、いかに子どもの興味・関心や夢中になることを基盤としていくことが大切であるかということを追及しています。



園長先生

「がんばったら何でもできるんだね。」「みんなの中でがんばれるからできるんだね。」「みんなが応援してくれるから一人じゃないよ。」「次もまたやってみたい。」というような気持ちを支える手伝いを保育士はしています。その中で自己肯定感が醸成されていきます。「やってみたい」、「知りたい」というワクワクした思いを、これからも幼児教育と小学校教育において培っていくことはとても大切です。

形だけの連携ではなく「学校が変わること」の意識を管理職がもつことが重要です。まずは管理職が一番の応援団になることが職員の意識を変えていくことにつながります。つまり、それは学校や教師の都合ではなく、真に児童を主体とした学校システムの改善が求められることとなります。子ども、保護者、職員のウェルビーイングにつながっていくことを、小学校の変革を通して、実践から感じさせることにつなげていく必要があると思います。



校長先生

◇ おわりに

20 年以上前、1 年生の担任だった時の話です。学区を走る電車のデザインの募集がありました。「こんな電車がいい」、「え〜、カッコいい」、「かわいい電車がいいよ」と、大盛り上がり。いつにも増して真剣に、みんな夢中になって思い思いの絵を描きました。

～ 次の日の朝 ～

「先生、先生、大変！電車、変わってなかった！！」と、血相を変えて教室に駆け込んできた子どもたち。前日に描いた 1 年 2 組の誰かの絵が選ばれて、今日、電車になって走っていると思っていたのです。

子どもたちは、自分の絵が電車になると張り切り、誰の絵が選ばれるか、どんな電車になるのか、ワクワクしながら描いていました。そのワクワクした気持ちを持ち帰り、楽しみに登校してきたのです。「子どもの世界、思考って・・・、こういうことなんだ」と考えさせられた出来事でした。

今、振り返ると、ここでいう架け橋期の子どもの姿そのものでした。遊びながら学んできた幼児期から自覚的な学びとなっていく 1 年生。その接続の時期を行ったり来たりしている思考。「やってみたい」「楽しみ」「選ばれたらうれしい」という思いや願いの実現に向けて張り切っていた子どもの姿でした。

幼児教育施設の先生方は、子どもたち一人一人の興味・関心を捉え、「学びの芽生え」を育み、子どもたちが「やってみたい」と自ら関わりたくなるような環境の構成をして保育をしています。子どもが主体です。小学校以降の「自覚的な学び」においても、子どもたちの「やってみたい」の気持ちを大切にしていかなければなりません。子どもたちの「やってみたい」の原動力となる、学ぶ力を引き出すのが、ワクワクする気持ちです。「どうしようか？」「どうしたい？」など、子どもたちに問うことで、子どもたちは考え、アイデアを出し合って生活や学びをつくっていきます。子どもたちの「やってみたい」や子どものワクワクする気持ちを大人も一緒にワクワク楽しんでいってほしいと思います。幼小連携の架け橋は、幼児教育から小学校教育への一方通行の橋ではありません。お互いが歩み寄り、行き来のできる橋です。

子どもたちの「できる！」、「やりたい！！」、たくさんのワクワクがふくらみ、楽しい学校生活が始まることを願っています。

本稿で解説してきた架け橋期の教育の重要性や幼児期に育まれた資質・能力が小学校教育にどのようにつながっているかの認識を社会全体で共有し、全ての大人が立場の違いを越えて自分の事として関わり、子どもたちを支えていくことが求められています。また、幼児期の「遊びは学びであること」の理解を広げていく必要があります。各学校種段階において、架け橋期の教育の特性について広く認識の共有を図り、全ての人のウェルビーイングを目指していけるよう、本資料を御活用下さい。



【令和 6 年度幼児教育調査研究リーフレット】

参考資料

◇文部科学省 Web「幼保小の架け橋プログラム」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm

◇文部科学省 Web「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/mext_02697.html

◇栃木県幼児教育センターWeb「幼小連携の推進」「調査研究」<https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/youji/>

